

Title	A Cognitive Exploration of English Tough Constructions and Related Phenomena
Author(s)	南, 佑亮
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49401
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【43】

氏名	南 佑 亮
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 22624 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	A Cognitive Exploration of English <i>Tough</i> Constructions and Related Phenomena (英語の <i>Tough</i> 構文とその関連現象についての認知的研究)
論文審査委員	(主査) 教授 大庭 幸男 (副査) 教授 加藤 正治 教授 神山 孝夫 准教授 岡田 禎之

論文内容の要旨

本論文は、認知言語学の枠組みで英語の *Tough* 構文の意味的側面とそれに関連する現象を分析したものである。*Tough* 構文とは、 NP_i be Adjective to infinitive φ_i という抽象的な形式 (φ_i は NP_i が移動して生じた痕跡を示す。) を有する文の総称で、その具体例は *John is easy to please.* のような文である。この文の特異性は、*John* が主語であると同時に *please* の目的語でもある点にある。この形式の機能は、主語 (=John) の属性を複合述語 (=easy to please) により描写することである。本論文では、このような *Tough* 構文について4つの問題 (①to不定詞句にどのような意味タイプの動詞が生起可能か、②be動詞の後にどのような意味タイプの形容詞が生起可能で、その解釈はいかなるものか、③to不定詞句内の動詞句が表す概念と形容詞が表す概念がいかに相互作用し合っているか、④異なる意味クラスに属する形容詞同士がどのように同一の表層形式に結びついているか) を設定して、この構文のもつ意味構造を解明しようとしている。本論文は7章からなり、総頁(英文)数はA4判 vi+239頁である。

第1章では、*Tough* 構文の意味特徴を記述し、上記4つの問題を設定したのち、本研究が立脚する認知言語学の中核をなす経験基盤主義について概略している。

第2章では、概念化者が世界について持つ背景知識を捉えるモデル（領域、フレーム）と、概念化者のカテゴリー化能力を基にして構築された Croft(2001)の根本的構文理論を概観している。

第3章の前半では、上記①に関連して、動作主性カテゴリーのプロトタイプ素性は素性間に一方向的な含意関係が存在するように規定すべきだと主張し、「意図>制御性>有意識」という動作主性素性階層を試案として提示している。その上で achievement クラスの動詞が示す動作主性の細かな区別を捉えるためには、この素性階層はさらに精緻化する必要があると論じている。本章の後半では、上記②や③の解明に関わる Speaker-based Subjectivity (以下、主観性)と Viewpoint Subjectivity (以下、主体性)という二種類の Subjectivity を概観している。本研究では、Tough 構文の形容詞の意味を主観性で捉え、to 不定詞句で想起される事態を主体性で捉えている。

第4章では、achievement アスペクトを表す動詞句のうち、有意識者を主語にとるものを「成功」「失敗」という対立概念によって二つに分類し、それぞれの意味特徴を捉えるために3章で提示した動作主性素性階層を「行為意図>結果意図=実現制御性>前提制御性」のように精緻化している。これによって、to 不定詞句内の動詞句がさまざまな構文環境において解釈の強制を受ける(不)可能性が捉えられると論じている。

第5章では、難易度を表す形容詞の Tough 構文において、to 不定詞句の動詞句が結果意図の素性を伴わない場合（つまり動詞句が「失敗」を表す場合）のみ、デフォルトの「難易度」解釈から「傾向・頻度」解釈が派生されると論じている。さらに、この解釈プロセスを支える認知的メカニズムとして、動作主性素性階層に加えて形容詞と動詞句の意味的マッチング関係を取り入れている。最後に、当該事象の拡張事例を観察し、その拡張を動機づけている認知過程、あるいは別の拡張経路が抑圧される原因を主観性と主体性の観点から説明している。

第6章では、Tough 構文のうち、5章で扱った難易度を表す形容詞以外の意味クラスの形容詞を取扱い、Tough 構文というカテゴリーの全体像を領域特定性と主観性の軸を用いて記述している。領域特定性に関しては、British National Corpus での調査結果に基づき、形容詞述語の領域特定性がそれと共起する動詞句の種類を強く制限していること、また主観性の軸においては、「物理的知覚」、「評価態度」、「可能性モダリティ」という三つの焦点を設定し、それによって Tough 構文と Pretty 構文の間の連続的なカテゴリー関係が特定できることを示している。

第7章は結論であり、本研究の目的がいかに達成されたかを述べている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、認知言語学的な立場から英語の Tough 構文の意味的側面やそれに関連する現象を論じたものである。この構文に関して上記4つの問題を設定し、それを解決するために独自の仮説をたてて、問題解明に果敢に取り組んでいる。本論文には新たな知見や分析が提示されているが、その中で評価すべき点が4つある。まずその1つは、動作主性素性階層を仮定することによって、「成功」や「失敗」を表す動詞句の意味を適切に特徴づけているとともに、これらの動詞句に関わるさまざまな言語事実を英語の構文との相互関係によって説明していることである。第2は主体性と主観性の区別を明確にした上で、話者の評価的態度と可能モダリティを取り入れ、主観性のスケールを提案していることである。そして、Tough 構文に生起する形容詞のさまざまな意味タイプ (likelihood, difficulty/expense, emotive evaluation 等) をこのスケール上で説明している。第3は社会的規約フレームを仮定し、easy クラスの形容詞の Tough 構文に見られる2つの読み(「難易度」「傾向・頻度」)を適切に説明していることである。特に、「失敗」を表す動詞句の Tough 構文が「傾向・頻度」読みをもつ理由をこのフレームによって適確に説明している。第4は、領

域特定性と主観性の軸を用いて Tough 構文というカテゴリーの全体像を明らかにしたことである。特に主観性の軸では、「物理的知覚」「評価的態度」「可能性」を設定することによって、これまで Tough 構文とは異質なものとみなされていた Pretty 構文を自然な形で説明している。

しかし、次のような問題もある。まず、基本概念としていくつかの素性が提案されているが、その中には一方がもう一方に対して非対称的に影響を与えるペアがある。この非対称性が生じる理由を明確にすべきである。また、動作主性の素性である実現制御性と前提制御性の間に認められる含意関係を図式化しているが、それぞれの概念が時間軸上で有する領域間の包含関係と厳密には対応していないために、図式化がかえってその含意関係の理解を妨げている恐れがある。また、形容詞基盤型の構文と比較して、補部動詞基盤型の構文の場合には、生じる動詞句のタイプが制限されたり、複合動詞句が利用できないといった事実が認められることを、コーパス調査で得られた分布特性と充分に関連づけるところにまで至っていない。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。